

のを履くことは避ける等の対処も、みずむしが発生しにくい環境作りにつながる。

むずむし、たむしは古くから知られている皮膚疾患のひとつであり、様々な民間療法が存在するが、それらの中には科学的根拠が見出されないものも多く、かえって症状を悪化させる場合がある。

【剤型の選択】 一般的に、じゅくじゅくと湿潤している患部には、軟膏又はクリームが適すとされている。液剤は有効成分の浸透性が高いが、刺激が強いのが難点である。皮膚が厚く角質化している部分には、液剤が適している。

(b) 代表的な抗真菌成分、主な副作用、受診勧奨

① イミダゾール系抗真菌成分

硝酸オキシコナゾール、塩酸ネチコナゾール、ビホナゾール、硝酸スルコナゾール、硝酸エコナゾール、クロトリマゾール、硝酸ミコナゾール、チオコナゾール等は、イミダゾール系の抗真菌薬と呼ばれ、白癬菌の細胞膜を構成する成分の生合成を妨げたり、細胞膜の透過性を変化させることにより、白癬菌の増殖を抑える。

あるイミダゾール系成分が配合された水虫薬でかぶれたことがある人は、他のイミダゾール系成分が配合された製品も避けることが望ましい。

② 塩酸アモロフィン、塩酸ブテナフィン

いずれも白癬菌の細胞膜を構成する成分の生合成を妨げることにより、白癬菌の増殖を抑える。

③ シクロピロクスオラミン

白癬菌細胞を包んでいる膜に作用して、細胞の増殖・生存に必要な物質の輸送機能を妨げる、白癬菌の増殖を抑える。

④ ウンデシレン酸、ウンデシレン酸亜鉛

患部を酸性にすることで、白癬菌の発育を抑える。

⑤ ピロールニトリン、シッカニン

抗真菌性の抗生物質で、菌の呼吸や代謝を妨げることにより、白癬菌の増殖を抑える。

ピロールニトリンは、単独での抗真菌作用は弱いため、他の抗真菌成分と組み合わせて配合される。

⑥ その他

抗真菌成分としてトルナフタート、エキサラミドが配合されている場合もある。

また、生薬成分として、モクキンピ（アオイ科のムクゲの樹皮）のエキスにも白癬菌の増殖を抑える作用があるとされる。

【主な副作用、受診勧奨】 一般に、湿疹とみずむし等の初期症状は類似しており、湿疹に抗真菌作用を有する成分を使用すると、かえって湿疹の悪化を招くことがある。陰囊に痒み・ただれ等の症状がある場合は、湿疹等の他の原因による場合が多い。湿疹か白癬菌感染かはつきりしない場合に、抗真菌成分が配合された医薬品を使用することは適当でない。

強い刺激を生じたり、症状が悪化する可能性があるため、膣、陰囊、外陰部等、湿疹、湿潤、ただれ、亀裂や外傷のひどい患部、化膿している患部には使用を避ける必要がある。患部が化膿している人は使用せず、抗菌成分を含んだ外用剤を使用する等、化膿が治まってから使用することが望ましい。

また、ぜにたむしやいんきんたむしで患部が広範囲に及ぶ場合は、自己治療の範囲を超えており、また、内服抗真菌薬の処方による全身的な治療が必要な場合もあるので、医療機関（皮膚科）を受診することが望ましい。

みずむしやたむしに対する基礎的なケアと併せて、みずむし・たむし用薬を2週間位使用しても症状が良くならない場合には、抗真菌成分に耐性を生じている可能性や、白癬菌感染ではない可能性もあるので、徒に別のみずむし・たむし用薬に代えたりせず、いったん使用を中止して、医療機関（皮膚科）を受診することが望ましい。

## 6) 頭皮・毛髪に作用する配合成分

育毛を標榜する成分を含む医薬品では「壮年性脱毛症」「円形脱毛症」「靴擦れ性脱毛症」「瀰漫性脱毛症」等の具体的な疾患名を掲げた効能・効果を併せ持つことが認められている。

### (a) 塩酸カルプロニウム

頭皮・毛根の血管を拡張し、血流を増加させ、発毛を促進する効果がある。血流量が増えることで、毛根部に酸素と栄養分が送り込まれ、育毛・発毛効果が高まる。

### (b) 生薬成分

#### ① カシュウ

タデ科ツルドクダミの塊根を用いた生薬で、頭皮の余分な脂質を取り除く作用がある。

#### ② チクセツニンジン

ウコギ科トチバニンジンの根を用いた生薬で、毛根、毛母細胞を刺激して、細胞の働きを良くする作用がある。